

# PRESS Release

平成 26 年 6 月 30 日

## ノルウェーリーグ日本人女性プロ ハンドボールが花巻にやってくる！



世界トップレベルのノルウェーリーグで活躍している内林絵美選手が、希望郷いわて国体を2年後に控えた会場地の花巻市に、小・中学生対象にハンドボール指導にやってくる!!!

○主催 岩手県ハンドボール協会

○主管 花巻市ハンドボール協会

○日時【場所】内容

- 平成 26 年 7 月 5 日(土) 9:00~12:00 【花北社会体育館】花巻北中学校ハンドボール部指導  
(1年男4・女7、2年男8・女5、3年男8・女5 計37人)  
[午後：陸前高田市へ移動(被災地支援)]
- 7月6日(日) 9:00~12:00 【花巻市立桜台小学校体育館】同上  
13:30~16:30 【花巻市総合体育館】岩手県民体育大会ハンドボール競技  
視察後、小学生指導者対象指導
- 7月7日(月) 9:00~ 9:20 【花巻中学校】校長挨拶、打合せ  
9:40~10:40 (2校時) 【花巻中学校体育館】体育授業1年女子 30人  
10:40~11:40 (3校時) 同上 // 1年女子 30人  
11:40~12:40 (4校時) 同上 // 1年男女 30人

○講師紹介：内林絵美(うちばやし えみ) 1980.3.28 生 神奈川県出身

南林間中学からハンドボールを始め、川崎北高、国土舘大学、SCかながわを経て04年に渡独。SCリーザで4年間、BSVザクセン・ツヴィッカウで4年間プレー後、12年にブンデスリーガ1部フランクフルターHCに移籍。選手生活の傍ら、**ライブツィヒ大学体育学部を卒業し、小学校体育及びクラブコーチ指導**にも携わる。

13年7月に突然のチーム破産を受けて、ノルウェー2部**ヨーヴィク(Gjovik)**に加入。

### 【岩手県との縁】

☆岩手県高体連ハンドボール専門部「**ドイツ遠征**」の折、「岩手県関係者が、**SCリーザでプレーする内林選手を応援した**」ことがきっかけで縁が繋がっている。

☆東日本大震災直後、**自転車**で**東北各地の被災地「陸前高田市」**経由で、花巻を訪れて、ハンドボールを通じて元気を届けてくれた。

☆14年4月、**上町史織**(上田中、盛岡第二高、国土舘大学、北國銀行)選手が同チームに加入、2人ともチームの中心選手として活躍中。

○世話人：中島昭博(なかしま あきひろ)

携帯 TEL 080-1844-4406

岩手県国体・障がい者スポーツ大会局勤務

○[エミの生き様～ランダム日記～](http://blog.livedoor.jp/emi_au_riese/)

[http://blog.livedoor.jp/emi\\_au\\_riese/](http://blog.livedoor.jp/emi_au_riese/)

☆☆☆日本、ドイツ、ノルウェーと、ハンドボールを中心に、毎日おもしろおかしく生きているエミの私生活のぞき見ブログ☆☆☆

以下、ブログから引用（2014年04月23日）

## 「2013/2014シーズン」



左から4人目が内林絵美選手

〃 3人目が上町史織選手  
(ニックネーム：キョン)

私が昨年8月末に移籍してきた **Gjovik Handballklubb** (ヨーヴィク・ハンドボールクラブ) は、2007年に **IHF World Player of the Year** に選出された **Gro Hammerseng-edin** を育てた伝統のあるクラブです。

ここ10年ほどは、1部リーグ、2部リーグ間で昇格、降格を繰り返していましたが、ユース育成に力を入れるコンセプトはその後変わらず、昨年は1998年生まれの子女子ユースチームがノルウェー優勝を果たすなど、将来に大きな可能性を秘めた選手が多くプレーしています。町ぐるみで応援されて伝統もあるクラブが苦しい状況に追い込まれるきっかけとなったのは、昨シーズンの結果でした。

12/13シーズンをノルウェー1部リーグで戦ったヨーヴィクは、序盤こそ数ポイントを獲得しますが、シーズン中盤以降は連敗を重ねてチームも内部分裂。年明けからは一勝もすることなく2部リーグへ降格しました。スポンサーもチームへのサポートを大幅にカット。それに伴い、チームの主力だった全ての選手が移籍してしまいました。昨年5月の時点で契約していた選手はゼロ。チームはまさに、生き残りを懸けた崖っぷちに立たされていました。そこから、チームに残る決断をした若い選手たちと契約を交わし、さらにヨーヴィク近郊の町から選手を集め、8月の時点でリーグ参戦できるまでに立て直しました。そして、8月も終わろうとする頃、私はこの町へやってきました。

私が担うべきだった役割は、若い選手中心のこのチームに、経験を還元すること。同時にコーチとしてユースチームのトレーニングをして、将来のトップリーグ選手を育てること。ヨーヴィクが1部リーグへ戻り咲いて、そして、ずっとトップリーグでプレーし続ける土台作りを手伝うために、第二の故郷となったドイツを離れました。

[中略] やっと正式な滞在ビザが下りて試合に出場できるようになったのは12月。クリスマス前のホーム2連戦で快勝すると、1月にはキョン(上町史織)が移籍してきて上位を相手に3連勝。チームには、上昇気流に乗っているかのような勢いがありました。この時点では、誰一人として降格の心配などしていませんでした。個人的には、密かに昇格の可能性を信じていたほどでした。[中略] シーズン最終戦のこの日。試合前に監督の Borge の言葉を聞きながら、込み上げてくるものを押さえるのに必死でした。「去年の5月。新しいシーズンを迎える前に、オレのもとには誰もいなかった。そこから選手を集めて、新しいチームを作った。ゼロからのスタートだった。このチームなら2部リーグで戦えると思っていたし、チームの当初の目標を考えれば、今回の降格は残念で仕方ない。でも、これも一つのプロセスだ。将来、ここにいる君たちが1部リーグのコートに立つ日に向かう過程だ。オレはここに残る。また新たな歩みを進める。ここにいる選手の一人でも多くが、再びこのチームと共に歩みだすことを望んでいる。今日の試合は、新しく始まるスタートだ。」

この日、試合前の選手たちの表情は、それまでの2ヶ月半のものとは全く異なっていました。絶対に勝利してシーズンを終えようと、みんなが口々に言い合っていました。その言葉通り、この日のヨーヴィクのプレーには気迫と想いが感じられました。試合開始早々、左サイドの速攻から Njard に連取を許しますが、ヨーヴィクもレネの速攻、マリのロングシュートで応戦。リードを広げさせません。DFでは、前回アウェーでもやられた右45とセンターのクロスから何度も失点を繰り返します。狭い角度からでも確実にシュートを決めてくる Njard の両サイドのマークを厚くした分、広がった真ん中の4対4で両フローターのフェイントを守りきれませんでした。前半10分過ぎ、キョンがセンターに入ってから流れが変わります。サイド、ポストへのアシストでシュートチャンスを作り出しました。12年越しにキョンと再びチームメイトになってから、何度となくつながれたサイドへの完璧なパス。この日も、キョンが

右45のポジションに来た時は、そのパスだけを待っていました。そのパスを受けて私が右サイドから連続得点。ポストのステーネも体を張って7mスローを取ります。苦しい時間にもチームで戦ったヨーヴィクは、12-14で前半を折り返しました。2月以降、崩れることの多かった後半のスタートを、この日はヨーヴィクが支配します。DFが前半よりも良くなって、ハードなアタックから相手のミスを誘いました。味方同士でフォローし合って、打たれてもキーパーのヴィルデが止めてくれました。そこからの2次速攻では、肩の負傷で思うようなシーズンを送れなかったイングリが Njard DF の隙間を果敢に割っていきました。左45のマリも本来のプレーが戻って来て、セットでは右45のリザのステップシュートが相手ゴールに突き刺さりました。この日の後半は、ヨーヴィクが勝っていた時のプレーでした。忘れていた、失われていたヨーヴィクらしいハンドボールでした。ラスト2分、2点のリード。

1部昇格の望みを残すために勝利が絶対条件だった Njard の最後の猛攻を守りきったヨーヴィクが、27-26 (12-14) で、最終戦を勝利で飾りました。本当に遠かった一勝でした。

このメンバーで最後に勝てたという喜びは、「降格するようなチームじゃない」「今日の試合がたった一回でもこの2ヶ月半でできていれば」という悔しさを勝つことはありませんでした。22年間ハンドボールをプレーしてきて、試合の中で変えがたい大きな波を感じることも、シーズンを通して目に見えない流れに翻弄されることも多くありましたが、今シーズンのような経験は今までしたことがありませんでした。昨シーズンのチーム崩壊の記憶も、チームが若いという事実も、今回のチームの崩れ方を説明するに足るものではないと感じています。メンタルが及ぼす影響が、こんなにも大きいということを改めて痛感しました。まだまだ知らなかったハンドボールの奥深さを垣間見て、そして、自分の力のなさを思い知ったシーズンでした。私を救ってくれたチームの力になりきれなかったという無力感を、いまだに消すことができません。シーズン全日程を終えたヨーヴィクの最終順位は、8勝3分15敗で11位。2部リーグ残留を果たした9位の Fana、10位の Raelingen とはわずか1ポイント差でした。

私はこの最終戦、前半30分、後半15分の出場で4得点。感謝の気持ちを込めて、全力でプレーすることができました。今シーズンは、滞在ビザ取得に問題が出た関係で出場できなかった5試合を除く21試合全てに出場。計74得点。Player of the match 4回。

優しい仲間にもまれて、新しいことをたくさん学び、そして魂をこめて戦ったシーズンでした。シーズンを通して皆さんの応援に支えられ、励まされ続けたシーズンでした。本当にありがとうございました。Borge の言ったプロセス。私もまだ夢を叶えるための過程にいます。今はしっかりと考えて、心の声を聞いて、迷いのない決断をしたいと思っています。

神奈川県全域・東京都町田市の地域情報紙



「夢舞台でも自分らしく」

大和版 2014年6月30日 月曜日

○…2004年、ハンドボールがやりたい一心で、単身渡独。言葉が通じなくても「不安はゼロ、希望しかなかった」と笑う。日本語学校に通いながら3部リーグのSCリーグに入団。2年で帰国の予定がチームの昇格により契約を延長。気付けば移籍も経験し、8年をドイツで過ごした。そして今年、プロリーグの最高峰「ブンデスリーガ」1部へ移籍が決まった。32歳という年齢もあり「最初は冗談だと思った」そうだが今は違う。「これまでの頑張りと同僚の人の応援が、夢舞台に立たせてくれたんだと思う」と目を輝かせる。

○…ハンドボールに出会ったのは南林間中学。自分でも驚くほど没頭し、以降の人生は全てハンドボールが最優先。高校も大学も競技の環境で選んだという。ただ、大学卒業後は実業団へ進みたいと思いつつも、「そこまでの選手じゃない」と自分で限界を決めて高校教員に。しかし、教員有志チームでドイツを訪れた際、日本から来た見ず知らずのチームを熱心に応援してくれる姿に心が震えた。「この国でプレーしたい」。夢が芽生えたら、あとは実現へ走るのみ。2年の準備期間を経て、海を越えた。

○…「思い立ったら即行動」、「決して諦めない」が信条。昨年も、ドイツのチームメイトやファンが集めてくれた義援金を手に、岩手県陸前高田市へママチャリで向かった。「大きな額では無いけど想いの込められたお金。被災地に直接手渡したい」と思ったからだ。走行距離は600Km。4日で到着を目指す過酷な日程ながらも、睡眠時間を削って走りきった。「自転車かと思ったほど進まなくて。あんなにキツイとは思わなかった」と屈託無く笑う。